

小説半導体戦争（四）

杉田望

4 撤退声明

1

冬にしては珍しく、研究所の窓からまばゆく輝く東京の夜景がくつきりとみえる。年の瀬もおしつまった赤坂の街は、奇妙に活気づいている。東洋経済研究所は、赤坂の歓楽街の一角に連なる高層ビルのなかにあった。研究所の内部は機能的で快適に設計されている。それにもかかわらず、どこか非人間的で冷たい印象を与える。オフィス・ビルも極限まで機能美を追求して作ると、かえって息苦しくさえなってしまう。人の気配は途絶え、夜の研究所の内部はあくまで静かだった。

コンピュータ・ルームのあたりで、蛍光灯の明りが寂しく光っている。わずかに人の存在を感じさせる微妙な陰影が漂っている。研究室から遮蔽される形で作られているコンピュータ・ルームから人の気配が感じられる。誰かが居残りの残業をやっているようだ。すでに午後十一時を回った時刻になっていた。



久保理恵は先ほどからコンピュータに立ち向かい悪戦苦闘を続けていた。通産省から受けた委託調査の仕上げはあと三カ月ほどの時間しか残されていなかった。そのために、今日も居残りの残業を強いられていた。コンピュータのキーボードをたたく音がリズムカルに響きわたる。理恵は口元をきつくしめて、手際よくキーボードを操作する。コンピュータにデータを入力する作業が延々と続く。単純作業のくりかえしである。

すつきりと背筋を伸ばし、コンピュータに立ち向かう理恵は美しく輝いていた。ぴりぴりとした・緊張感が肩や腕のあたりに漂っている。手元で

操作しているのは端末機で、計算機センターに設置された大型機と直接アクセスしながら作業を進めている。

理恵は作業の手を休めて、ディスプレイ上に表示されたコンピュータの解析結果をのぞき込んでみた。

どうやら当初の予想値とは、だいぶ違った結果となっているようだ。この分だと、もう一度作業は最初からやり直した。理恵は気を取り直し、データを詳細に点検すると、先ほどと同じようにデータを次々に入力していく。

理恵が進めている作業は、日本企業の海外投資のうち、先進国向け投資が当該先進国の雇用機会の増大にどのような影響を与えているか、さらに先進国に対する投資が当該先進国の経済活性化にどのような効果を与えているか、また、貿易収支と外貨バランスにどのような効果と影響を与えているか、それを自動車、家電製品、鉄鋼、電子工業など各セクター別に西暦二〇〇〇年を目標におき、シミュレーションすることにあつた。

大がかりなプロジェクトということだけでなく、どのような結論を導き出すかによって、関係者に対する影響も少くないだけに、調査としては慎重に構えなければならない。その意味では非常に難しいテーマである。そろそろ調査の概要ができ上がっていないなければならない時期である。が、調査日程からいうと、作業はだいぶ遅れている。理恵は少し焦りを覚えていた。

連日、深夜に及ぶ作業が続いている。だから佐瀬卓也とはこの十二月に入ってから、あの時以来逢っていない。作業が早く終れば、今夜は二週間ぶりに佐瀬の顔がみられるのだが、作業は、まだ終りそうにない。

今度のプロジェクトでは理恵は初めてプロポーザルを自分で書き、調査のアウトラインから詳細な調査項目まで、すべて自分で決めた。こういう形で責任を待たされたプロジェクトは、研究所に勤めて十年目になるが、これが最初である。建前としての男女機会均等とはかく、これまでの慣習からいえば、やはり女性の位置は男たちの仕事を手助けするアシスタントの立場を超えるものではなかった。与えられるのはほとんどが補助的な仕事ばかりで、男たちは女性の研究員に、それ以上のことは期待もしてい

なかった。いずれにしても男性優位の秩序は絶望的なほど、確立していた。

だから理恵がチーム・リーダーに就任したこと自体が、たとえ実験的なケースであったとしても、異例のことだった。いや、この保守的な研究所にしてみれば、大事件といった方がよい

かも知れないのだ。その分だけ理恵は大きなプレッシャーを感じている。

「これだけの仕事を女性に任せるのはリスクが大きいのではないか……
なにしろこれは通産省の委託事業ですからね」

初めてのことはなんでもそうだが、とくに古い体質をもつこの研究所では、女性にこの仕事を任せることをめぐって、今でも所内の一部には反対意見が根強く残っている。もめた理由は二つあった。一つは女性に仕事を任せること自体の賛否、二つは出向者によって主力が握られている研究所の内部では、プロパー軽視の風潮があることで、反対論者たちは、この研究所では先例がないことを論拠として、理恵のチーム・リーダー就任に陰湿な形で反対したものだった。

理恵たち女性の研究員のほとんどがプロパーである。だから研究所の内部には奇妙な対立の構図が生まれていた。ともかく何事につけても重要なことは「先例」であり、それがこの研究所では物事を決める絶対的な基準とされていた。理恵には滑稽なことにみえるのだが、男たちはそのことにこだわりを持ちながら真剣に議論をしている。それが大真面目なものだから余計に滑稽だった。

理恵はこの分野では一廉ひとかどの専門家として名が通っていた。それはこつこつと勉強を租・み上げていったことの成果である。腰掛けのつもりでくる本店からの出向者よりは、ましな仕事ができるのではないか。理恵には自信があった。実力やキャリアからいって、所内の誰と比べても遜色ないと思う。

問題は理恵が女であるということだった。

東洋経済研究所には、キャリアと呼ばれる何人かの女性の専門職の研究員がいた。全休からみれば、女性の専門職研究員の数はいくらも多くなはいい。同期の新島良子は理恵と一緒にキャリアとして採用された一人で、彼

女は国立大学からこの研究所に入った才女である。プロジェクト・マネジャーに理恵が最終的に決まったとき、この研究所で女性がプロジェクト・マネジャーを務めるのは、理恵が最初で最後になるかも知れない、そんなことをいって、二人で笑ったことがある。

だが、正直いって、今度の場合は女同士の関係も微妙だった。所内でも才女として名の通っている新島良子は、依然としてアシスタントの位置にとどめおかれている。これは微妙なことだった。同僚の幾人かはどこかよそよそしい。こういう場合、女性だからといって、決して味方ということではない。女性の同僚たちの前では、だから率直には喜べなかった。

それに男たちも今度のプロジェクトに対しては、経過が経過だけに決して協力的であるとはいえなかった。理恵はときとして、孤立感さえ味わっている。

「先例を作ればいいじゃないか」

反対を押し切って、理恵のグループにこの仕事を任せることにしたのが、研究調査部長の野沢崇^{たかし}だった。野沢研究調査部長は接客以外に所内では仕事をしている姿をみたことがない。一日中、新聞や雑誌に目を過して時間を過ごしている。必要なこと以外、会議でもほとんど発言をすることはなかった。どこか大人の風格があり、悠然とかまえている。理恵にもなにを考えているかわからない男にみえることがある。

幾度か誘われて、一緒に飲みに連れていってもらったことがある。茫洋^{ぼうよう}としているのはいつもの野沢と変わらないが、職場の上司としての立場を離れれば、個人的には愉快な人物だった。それにそういう場所では職場のことに触れるような無粋なことはしない。そのことも好感が持てた。

野沢は留学していたコロンビア大学のビジネス・スクールから帰ると、札幌支店や国内営業などを転々としたのち、ごく最近まで本店にあたる金融機関の調査部に勤務していた。若い時分に二年間だけ、東洋経済研究所に出向したことがある。だから東洋経済研究所での勤務はこれで二度目のことである。女性に今度のプロジェクトを任せるかどうかでもめたとき、たいした理由もいわずにあっさりと、久保理恵にこの仕事を任せたらどう

か、と発言した。何事につけても口数の少ない人物だから、こういう場合、野沢の発言は絶対的だった。

野沢崇はその意味では大変なリスクを背負ったことになる。たぶん男ならばさして気にすることでもないのに、経過が経過だけに理恵はそのことに對しても心の負担になっている。男どもの妬^{ねた}みくらいねばねばして陰湿なものはない。理恵は時々、そんなことを感じることもある。

全ての作業に関して、実質には理恵が責任を持たされる形となっていた。ただ、形式的には研究調査部長の野沢崇が総轄責任者になっている。野沢が反対論を押え込むためにやむを得ずとった措置^{そち}だった。これは奇妙な妥協だった。

プロジェクト・チームは理恵を含めて併せて五人。本店からの出向者で、今年で人行五半日という戸田貴之がサブ・リーダーで、理恵の大学の後輩にあたる高田聡子がアシスタントを務め、この下にアルバイトの女性が雑用やデータの整理などを手伝っている。困ったことに、女性研究員の部下として働くことに抵抗を覚えているのか、出向者の芦田貴之の態度は協力的とはいえず、戦力としてはとてもあてにはできそうになかった。実際、戸田はどんな場面でも傍観者を決め込んでいる。今日も戸田は定時に会社を出ている。高田聡子は今週の末からスキーツアーに出かけるとかで、早々と退社していた。

極端ないい方をすれば、理恵の仕事を気持ちよく手伝ってくれるのはアルバイトの女性たちだけである。だからプロジェクト・チームの内部も決してうまくいっているとはいえない状態にあった。

いま、理恵がコンピュータと悪戦苦闘して取り組んでいるデータの解析作業は、本来だと戸田がやらなければならない仕事なのだ。

作業の遅れは今夜のように自主的に残業をやることで取り戻すことができるが、シミュレーション結果に基づき、どのような政策的提言を報告書のなかに盛りこむかが難題だ。つまりあるべき先進国投資の未来像をどのように描くか、従って、今度のプロジェクトからどのような

結論を導き出すかに関して、東洋経済研究所の内部では、初めて女性プロバーがまとめる報告書だということもあって、面白半分に口出しをする男

たちが多く、このために議論が百出して、意見が完全に二つに別れていた。

先進国向けの海外投資は、貿易摩擦を回避することを直接の目的として、とくに米国向け投資が積極的に進められてきた。特徴的なことは、八〇年代の後半に入って、自動車や自動車部品、家電製品、輸送機械、半導体などの電子部品といった製造業のシェアが急速に増大したことだ。これらの製品はいずれも貿易摩擦で米側から激しく叩かれた製品であり、そもそも対米投資がこうした貿易摩擦の回避手段として、積極的に進められたという経緯からいって、製造業投資に集中したのは当然の結果であった。

理恵はもう一度データをなぞってみた。対米投資のうち、製造業の投資が積極化した八四年を第二次対米投資ブームとすれば、これに対して八八年から始まった対米投資は第二次対米投資ブームと呼ばれていた。第一次ブームでは製造業のうち自動車や家電製品など量産加工型産業に対する投資が急激に増大したのに対して、第二次対米投資ブームの特色は、半導体などの先端技術産業に対する投資が増大したこと、また、従来の対米投資に比較して、投資規模が大型化していることに大きな特徴があった。

ともかく電子工業や精密機械工業など、いわゆる先端技術産業の対米投資ブームが続いている。とくに半導体やコンピュータの合併計画や企業買収など、日本企業による米国での事業展開が活発に行われていることが手元のデータによっても、明確に掌握することができた。いわれるように、対米投資が積極化したことで、対米貿易摩擦も鎮静化の方向にあることは確かだった。議会の不穏な動きや米国の関係団体によるダンピング訴訟などの動きもめっきり減少している。その意味での効果は確実に上がっているといえた。

理恵は対米投資額の推移と貿易摩擦発生件数との相関を比較するグラフを呼び出し検討してみたが、投資額が増大し、現地での生産額が増大するのにもなつて、貿易摩擦の発生件数は確実に減少する傾向を示していた。

対米投資が米国経済にどのような影響を及ぼしているか、それを雇用機会の増大との関係でみてみた。まず、半導体工業では投資額が急速な増大をみせているにもかかわらず全休として、雇用貢献度を示すパラメータは上昇しない。これをさらにブルーカラーと専門職とに分けて分析してみた

が、ブルーカラーでは逆に日本企業による雇用機会は減少する傾向を示している。半導体産業がそれほど大きな雇用機会を創出するとは考えてはいなかったが、それにしても低い値しか示していないことに、理恵は驚きを覚えた。

これに対して、投資品目と日本商品の米国市場でのマーケット・シェアの変動を比較してみると、日本商品のシェアは確実に増大している。この数字をみれば、日本企業の対米投資の戦略は予想以上の成功を収めたということになるわけだ。半導体でいえば、すでに日本企業によって六十パーセント近くのシェアが抑えられている。しかも汎用品のシェアが高くなっているのが特徴だった。

この数字をみる限りでは、確かに米国の半導体メーカーが日本企業に脅威を覚えても不思議ではない。ともかくすさまじい勢いで米国市場を侵食しているさまは一目瞭然だ。モトラム社が倒産に追い込まれたのは、日本企業の市場侵食が原因だと、モトラム社首脳が主張していることの可否はともかく、米国の司法省が日本企業を反トラスト法違反で摘発に踏み切ったのは、こうしたことが背景にあることは確かだと、理恵には思える。もつといえ、日本企業は米国が仕掛けた罠にはめられたのではないか、事態の推移をみていると、そんなふうにも思えてくる。いずれにしても、行き過ぎはどこの世界でも叩かれることになる。

次に対米投資と労働争議の発生件数との関連を検討してみた。データはいずれも直接関係企業からアンケート方式で集めたものであるだけに、正確である。労働争議の発生件数は対米投資の増大と一定の関連を待つて増大する傾向を示している。

労働組合が直接介入するような大規模争議のケースはまだ少なかったが、こまかくいえば、労働者の退職の事由のうち、雇用者による解雇件数が増えていることも気にかかることである。労働者の定着率も決してよい状況にあるとはいえないようだ。このことは米国の労働者たちは、いわゆる日本経営に必ずしも満足していないことを示しているのではないか。

データは世間の評価とはだいぶ違った答えを出している。

残念なことだが、一面の真実はたてまえしか語らないことがある。対米

投資に関しては、どうも樂觀論が多過ぎる。貿易摩擦の回避という局面からみれば、これは明らかに成功と評価できる。けれども問題としなければならぬのは、次のステップでいったいどういうことが問題となるかである。

流れは明らかに炭わってきている。半導体をめぐる反トラスト法違反の摘発は、明らかにその流れの変化を端的に示すものに理恵にはみえる。だからこそ、今後発生すると予想される問題について、研究者の立場から世間に対して、なんらかの警鐘を鳴らしておく必要があるのではないか。このプロジェクトが始まってから理恵は真剣にそのことを考えてきた。

しかし、研究所が理恵の調査に期待していることは明らかだ。つまり調査委託主の通産省が、貿易摩擦を回避する政策手段として、対米投資を熱心に推進していた経緯もあるので、敢えてそれに異論を唱えるようなことを、調査報告書に盛り込むべきではないか、それが所内の大勢的な意見である。

その意味では、反トラスト法違反事件の経過と問題の本質を徹底的に解明してみることが重要だ、と理恵には思える。この作業が一段落したところで、アメリカに出張して、進出企業の実態を調査することを思い立ったのもそのためだった。

先週、ニューヨークのシオリに連結を取ったばかりだ。そのとき、シオリはあいにく留守だったが、おりかえしの電話で、ニューヨークでのアテンドを快く引き受けてくれた。電話のようすだと、だいぶ仕事に追われているようだった。

いうまでもなく、この研究所では女性の研究員が海外に出張するのは理恵が最初のケースとなる。だからこの話も決してスムーズに進んだわけではなかった。予想どおりに所内から異論が出てきた。

やはりこの場合も「先例」の有無が問題になった。そうしただけなら議論に疲れを覚え、理恵はアメリカへの出張計画を途中で断念しようかと思っただ。ところが、野沢部長の決断で紛糾した問題も一応決着をみた。考えてみれば、今度の問題も理恵が女であるが故に起こったことである。男

であるなら、こんな問題は起こらないはずだ。それを考えると、口恨しさで胸がいつぱいになった。

その直後のことだったが、研究所の内部で奇妙な確が流れていることを新島良子から聞かされた。野沢部長と怪しい関係にあるのではないか、そんな確が流れているらしい。馬鹿馬鹿しい話である。確は誰かが面白半分に流しているようにも思える。ここでも男たちの妬みを買うことになってしまふのか、ともかく男たちは女性が職場で男たちと同じように肩を並べて仕事をすることを極端に警戒していた。

男女雇用機会均等法が施行されてすでに五年余りの歳月がたっていると、いうのに、実態はこのありさまである。女性たちが次第に仕事のなかに組み込まれていくに従って、こうした矛盾がより深まっていくのではないか、理恵にはそう思えた。

今度のことでも、野沢部長の決断がなければ、いまの職場の雰囲気からいって、とてもではないが、理恵の希望はいれられなかったに違いない。その意味では、野沢部長には感謝している。

だがそのことは、上司のさじ加減ひとつで女性たちはどのようにでもなる、ということではないか。むしろそのことの方が理恵には、問題であるように思える。その意味ではまだ女の位設は、職場のなかで制度的に保証された形で定着しているとはいいい難い状況にある。上司が代われれば、いつでも状況は旋わってしまう。そうした不安定な位置におかれているのが女性研究員の立場だ。これでは身分としても、制度としても、なんの保証もないも同然である。

その野沢部長も半年後には本店に帰ることが決っているらしい。今度はどんな人物が研究調査部長になるのか。新しい上司は、たぶん彼のやり方で女たちを扱うことになるだろう。そのことを考えると、たまらなく憂苦な気分になってしまう。

「あんまり無理するんじゃないよ」

今度のプロジェクトのことで研究所の内部にもめごとが起こっていることをどこかで聞いたのか、西村恒夫は顔をしかめてそんなことをいった。西村はもう一人の恋人である。西村までが、どこか刺^{とげ}のあるいいかたをし

たことに愕然^{がくぜん}とした。もちろん、西村は親切心で忠告したつもりのようなのだ。甘えるつもりはなかったが、彼ならば理恵の立場や気持ちを理解してくれるものと信じていた。その西村までがあんなことをいった。

ショックを感じた。そのとき以来、西村とデートの機会はめっきり少なくなっていた。佐瀬卓也の存在が理恵の心のなかで大きくなっていたことも確かだが、それだけではないような気がする。西村とのせつかくのデートのときでさえ、職場の話のことになる、そうした西村に対して感情的に反発してしまうのだ。

ともかく来春早々、アメリカ出張が決まった。来週には中間報告に対する所内審査会議が行われる予定だ。それまでに中間報告をしっかりと、まとめておくことが先決である。

「今日はこのあたりでやめておくか」

理恵は肩で息を吸い込み、軀の緊張を解くようにして、作業の手を休めた。背中に人の気配を感じて振り向くと、そこに大坪洋三の姿があった。こんな時間に……理恵は不自然なものを感じた。

どこかで飲んで、研究所に舞い戻ってきたのか、酒気を帯びて顔が赤らんでいる。目に異様な光があった。理恵は警戒するように軀を硬くした。大坪は研究所の業務部の次長である。いまでは研究調査部門から離れてはいるが、以前は研究調査部のエネルギー・セクションのチーム・リーダーを務めていたことがある。エネルギー問題に関しては、ちょっとした論客でもあった。

研究調査部は元々が、仕事を中心に組織された部門であるので、普通の縦型の組織とは追って、かなり流動的というか、弾力的に組織が運用されている。だから理恵は大坪が研究調査部に在籍していたころ、エネルギーの自給見通しに関して、一緒にチームを組んで仕事をやったことがある。もちろん理恵はアシスタントの立場として大坪の仕事を手伝っただけのことだが、あのときの大坪はそれなりに仕事はできたし、最初はそれはどの悪い印象は持っていなかった。理恵には好感の持てる人物にみえた。

大坪はまだ、四十に少し前だが、もう本店には帰れる見込みはほとんどない、同僚たちはそんな噂をしている。もしそれが本当だとすれば、大坪

は定年までこの研究所に釘づけにされるといふことなのか。

いつのころからか、大坪の性格が変わったように思える。このごろの大坪はどことなくひがみつぽく、性格がいじけている。所内では嫌われものだった。例のプロジェクトのチーム・リーダーを選ぶときに、反対意見に最後まで固執したのが大坪洋三だった。ともかく執拗に反対し続けたものだった。大坪が理恵のチーム・リーダー就任にあくまで反対したのはたぶんあのことを根に持っているからに違いない、理恵にはそう思える。

理恵は大坪と一度だけ過ちを犯したことがある。その目、理恵はいささか飲み過ぎていた。理恵にとつて、あれは自前軍事故にあつたようなものだと思つてゐる。前後不覚になつて気が付いたとき、大坪が理恵の軀の上で喘いでいた。まったく嫌いな男とそういうことになるはずもないことだが、そういうことになつてみると、大坪にひどい嫌悪感を抱くようになった。

無神経といふか、女の気持ちかわからない男といふか、そのことがあつてから、大坪は平然と理恵を自分の女であるかのように扱おうとした。理恵は冷たく突き放した。神経のどこかが途切れているのか、さもなくば神経に麻痺をきたしているような人間である。理恵は大坪を徹底的に無視した。それでも平然と理恵の軀を要求するような男だった。冷たい女であるとか、心がないとか、淫乱な女だとか、相手にされなくなった腹いせで大坪は理恵に向かつてあらん限りの罵倒を浴びせたものである。

「ずいぶん遅くまで頑張るんだね」

大坪は思惑ありげな笑いを口元に浮かべていった。どこかに皮肉な響きがある。理恵の方に歩み寄ると、肩を抱くようにしてディスプレイをのぞき込んだ。いかにも作業の中身に関心を持っている素振りである。すえたような酒の臭いがする。

軀に悪寒が走り、理恵は思わず身震いをした。

「手を離して下さい」

それでも平然として、理恵を抱きすくめようとした。理恵は手にした定規で思いつき大坪の腕を叩いた。厚顔無恥というのか、強引に組を押え

込もうとする。理恵は身をかわして、大坪を思いつき、突き飛ばした。大坪の幅が大きくよるめいた。

「まあ、いいじゃないか」

大坪は何事につけても自信たっぷりの話し方をする男だった。ふてくされた態度で、煙草に火をつけて揺らしている。理恵は油断なく大坪との間に距離をとっていた。そのとき電話のベルがなった。理恵は款われたように受話器を取り上げた。大坪はそれで氣勢をそがれたようである。

「男からか……」

大坪は捨てせりふを残すと、そそくさとコンピュータ・ルームから姿を消した。電話は佐瀬卓也からだった。これから逢えないか、と佐瀬卓也はいった。理恵は受話器を握りながら思わず涙ぐんでいた。

2

日興製作所の最高経営会議は珍しく活発な議論を呼んでいた。最高経営会議には大竹繁夫会長のほか、常務クラスの役員が全員出席している。大竹会長は先ほどの激しいやりとりを、腕組みをしながら黙って聞き入っている。いつもは一人で喋りまくり、一人舞台を演ずる大竹繁夫にしては、今日だけは珍しく寡黙だ。

「……よりによってこんな時期にですか。米国に新規の工場を建設するなんて、正気の沙汰とは思えない。その計画案は絶対承伏しかねますなあ」

副社長の渡辺公吉は語調を強めて、延々と反対論を展開している。今日の最高経営会議では海外事業本部から提案のあった「米国における半導体生産計画」を検討することが議題となっていた。

計画案は渡辺副社長がいうように、だれが考えても、いまの日米関係からすれば、リスクが大きいだけでなく、そもそもが無茶というものである。業界は反トラスト法違反事件の打撃で、すっかりまいっている。一部では米国市場から全面撤退を検討している同業企業もある、そんな噂がまことしやかに流れている情勢である。

計画を立案し、それを最高経営会議に提案したのは、海外事業本部長の

佐瀬常務だ。いわせるだけいわせて、あとでまとめて反論するつもりなのか、佐瀬は渡辺副社長のさきほどの反対論を平然と聞いている。しかし、会議の流れはどうみても渡辺副社長の方に有利なようだ。常識からいっても、渡辺副社長のいい分の方が遙かに説得的だった。

出席者のほとんどは計画に対する疑問を質するという形で反対の意見を述べている。しかし、大竹会長が沈黙していることに会議に出席している役員の誰もが、一抹の不安を覚え、ここでは断定的に計画を否定するような発言は控えている。提案者からの積極的な反論がないためか、ここにきて議論は膠着状態に陥っていた。

ころあいを見計らうようにして、佐瀬常務が発言を求めた。大竹会長が目で同意する合図を送った。常務としては最も若年の佐瀬は最高経営会議の末席に座っている。

テーブルの端からむっくりと軀を起こし、先ほどから反対論を述べ立てていた渡辺副社長を正面から見おろすようにして話を始めた。やはり大竹会長は腕組みをしたままの姿勢で佐瀬の話問いている。

「渡辺副社長がいわゆるように、同業他社は最悪の場合を想定して、米国市場から撤退を考えていることは事実だと思います。だからこそ、わが社にとってはチャンスではないのかと私は思うのです」

佐瀬の発言の主旨が理解できないのか、渡辺副社長は、当惑した表情を浮かべている。この場合、なにをもって「チャンス」というのか。その意味するところが、理解できないでいるようだった。大竹会長が笑みを漏らし、佐瀬の言葉を促した。

「同業他社は反トラスト法違反に問われてその対策で頭が一杯になっている。今後米国市場に対してどういう戦略でのぞむのか、皆目見当がつかない状態にある。つまり米国市場に空白が生ずるということですよ」

「だが、反トラスト法違反に問われているのは、同業他社だけでなくわが社も事情は同じではないかね」

そう聞いたのは、専務取締役で東京大型電算機国内営業本部長の田熊直樹だった。今日の最高経営会議に出席できるのは、常務以上の職責を担う十五人の上級幹部だけだ。田熊直樹はワンマンとして恐れられる大竹会長

に対してもわりあい率直にものがいえる硬派の男である。

田熊は今年で六十五歳だから、内規では取締役としては今期が最後になるはずだ。技術者出身の営業本部長としてはまあ、柔軟な思考ができる男だ。が、やはり佐瀬のいつていることは理解しかねるという表情を作っている。ただ、渡辺副社長とは立場が追って、嫌みは感じられない。その意味では率直な疑問の出しかたである。

田熊とは対照的なのが社長の坂本実だ。商法によれば、本来取締役会議では議長として議事進行の役割を担わなければならない社長の坂本実は、今日の最高経営会議でも終始沈黙を守っている。世間では大竹会長のイエスマンでおっているが、まったくそのとおりで、どんな場面でも自分の意見というものを述べたことがない。口の悪い連中は、だから社長になれたのだと、悪口をいつている。

これに対して渡辺副社長は野心満々の男だった。年齢から考えれば、大竹会長になにが起こってもおかしくはない。次の政権は自分だと、側近には明確に宣言している。それだけに自信家でもある。その自信過剰なところが大竹会長から疎^{うと}まれていた。

渡辺は自分の対抗馬は佐瀬常務であると思っている。佐瀬卓也には、渡辺副社長と張り合う意識など毛ほどもないのだが、大竹会長が佐瀬に特別な目をかけていることもあつてか、周囲は自然にそうした目でみるようになっていた。それは佐瀬にとつて、はた迷惑なことだった。

だが、渡辺副社長はそのことを、佐瀬が考えている以上に意識していた。今日の最高経営会議でも、計画の詳細が説明される以前から反対論を述べ立てていたのも、そのせいである。それを大竹会長が楽しむような表情でみていることが、この場に出席している役員にとつては気になることだ。「わが社の米国での市場支配の現状から申しまして、今度の反トラスト法違反の嫌疑は比較的軽微な処分済ませることができるのではないか、そのように考えられます。その点でいえば、東洋電気や東京通信機などとはだいぶ立場が違います」

「佐瀬常務は比較的軽微な処分済むのではないか、そのようなことをいわれたが、それならば大変結構なことですけど、その根拠をここで示し

ていただけますかなあ」

そこで渡辺副社長が再び質問した。ゆとりのある聞き方である。

「わが社はいわれるようなダンピングを目的とするようなカルテル行為には参加していない、という事実……これが重要であります。ただ、疑わしき行為に参加していることも事実でありまして、確かにこの面での対策を関係企業と協力して早急に講じる必要はございます。けれども、東洋電気や東京通信機とは一線を画して、この問題に対処することも必要であります」

佐瀬はあくまで冷静に答えた。こういう場合、いらいらするのは大抵、質問に回る側である。渡辺副社長はごたぶんにもれず、多少人を喰ったような佐瀬の答え方に、感情的になっていくようだった。二人のやりとりを残る役員たちが興味深げに聞いている。

「もう一度うかがうが、前回の最高経営会議であなたは疑わしき行為を含めて、米国政府がいつているようなカルテル行為には参加していない、海外事業を統括する責任ある立場でそのように答えられた。しかし、今の発言をうかがうに、わが社は問題になっているカルテル行為に参加していたような……少なくともそのように受け取られるような発言であったと、私には聞こえた。佐瀬常務……もう一度うかがうが、カルテル行為に参加していたかどうか、明確に答えていただきたい」

「協定に署名するなど、そうした具体的な形でカルテルに参加した事実はないことは前回の最高経営会議で申し上げたとおりです。しかし、この問題は米国の法律でいえば、大変微妙でありまして、関係者が意図的にカルテル行為を行ったかどうか問題になるのではなくて、結果として市場占有がどうなっているか、従って米国の半導体メーカーのシェアが結果として圧縮されたか、それとも拡大しているのか、法的にはそういうことが問題になるのであります。ただいま申し上げたことは、そのような意味において疑わしき行為に参加している事実がある、そう申したのであります」

二人のやりとりはなかなか噛み合うことがない。議論はスレ違いに終わっている。それにしてもあの短気な大竹会長は、今日に限って辛抱強く二人のやりとりを聞いている。仲裁を買って出るような格好で、発言を求めた

のが総務本部長で常務の本島俊彦だった。

「どうでしょうか……ここらあたりで対米投資計画を、佐瀬常務から一度うかがっておきたいと思うのですが」

「興味のあることだね」

大竹会長がぼそりと答えた。渡辺副社長は憤然としている。大竹会長が再び佐瀬常務を促し、発言を求めた。

「現下の情勢では、進出企業の大半は米国での現地生産高を大幅に減らすことで、米国に恭順の姿勢を示すことになるのではないかと思われる。が、米国市場の半導体需要はいくら後退しているからとはいっても、そう極端に減ることは考えられません。日本企業の撤退で供給はタイトになることが予測されます。これが対米投資をここで思いきってやることの理由です」

「なるほど……それで投資規模はどの程度と考えているのかね？」

大竹会長が聞いた。

「四億ドル程度は必要かと思われます。今後半導体の主力は4メガビットとなることが予想されますので、昨年、国内で生産を始めた4メガビットRAMをできれば米国市場に投入することを考えております」

ふうん、というなり声が上がった。大胆な計画である。佐瀬の大胆な発想法にほとんどの役員はただ感心している。

確かに同業他社の一部には、反トラスト法違反事件を契機として、米国市場での生産を再検討しようとする動きが出ていることは新聞報道などでも伝えられていた。たとえば、日浦の場合だと、米国での生産を縮小することで、米国に恭順の姿勢を示すことが、あるいは米国の強硬な対日政策を幾らかでもやわらげることができないか、そうした意味のことを日本電手工業連合会の役員会で盛んに述べ立てていた。通産省も日浦の長洲海外事業本部長がいったことに、大きな関心を示していた。だから佐瀬のいつていることは全く根拠のないことではなかった。

一時的にはあるにせよ、日本企業の米国からの一斉撤退という事態も考えられないわけではない。事件が発覚してからというものは米国の対日論調は日増しに悪化、今日の新聞報道だと、米国議会は上下両院に今度の問題で特別調査委員会を設置、来週早々から関係者を委員会に喚問して、

議会による調査が開始されることが決定されたと、報じていた。日本政府は事態を政府間交渉の場に持ち込むことで解決を図ることを米側に申し入れ、外相レベルの協議を提案したと、これも今日の朝刊が伝えていた。

だが、米国の態度は次第に硬化しているようで、日本側の提案は「これは米国で起こった犯罪を米国の司法当局が主権に基づき捜査中の事件であり、これを政府間協議のテーマとすることは、外交的には馴染み難い性格の問題である」として、軽く一蹴^{いっさう}されてしまった、というニュースをこれも今日の朝刊が伝えていた。



日米関係は最悪の状態に突入していた。だから米国から日本企業が一斉に撤退するという事態……これはありえないことではない。だが、だからといって日興製作所だけが米国に残留して、引き続き生産を維持することが可能なのか、誰が考えても否定的な答えしかみつからないのは、この状況ではあたりまえの話である。

「わが社の対米投資額はどの程度の規模になっていますかね……確か円換算で百五十億円程度かと思われるが、こうなってみると債権回収の方が問題としては優先して考えてねかねばならない、かように思う次第でありますか……」

佐瀬常務の活か一段落したところで、そういったのは、三専務のなかでは筆頭専務の橋本総吉だった。橋本専務は明確に渡辺副社長の側近であることを自ら認め、渡辺に対して忠勤を励んでいる男だ。社内における渡辺副社長の位置が固まっていらない段階から、渡辺の将来に賭けてこの十数年来、まことによく渡辺に尽くしてきた。

佐瀬は橋本の発言で氣勢をそがれたような顔をした。それに自分の提案を、誰もが真面目になって聞いているとは思えない会議の雰囲気、少しばかり苛立ちを覚えていた。

「橋本専務がいわれたことは別次元の問題である。それに本件に関する私

どもの提案主旨説明は終わっていない。引続き説明に当たらせていただきます」

橋本は入社でいえば、佐瀬の十年ほど先輩にあたる。先輩に対する態度としては、配慮に欠けた発言だ。そういういい方が、敵を作ることになるのだと、いつか大竹会長に説教されたことがある。若造が……橋本専務は露骨に不快な顔をしたが、これといって異論は挟まなかった。大竹会長の顔を窺^{うかが}っていた。

佐瀬は構わず話を続けた。投資計画の全容が次第に明らかになってきた。総投資額が四億ドル、工場の建設予定地は現在幾つか物色中である、と佐瀬はいった。生産品目はコンピュータ向け半導体としては将来、主力となるとみられる4メガビットRAMを中心として、コンピュータの周辺機器の製造も併せて行うというもので、これは確かに壮大な構想である。佐瀬は淀みなく計画案を説明している。

再び橋本専務が質問にたった。聞き方に刺^{とげ}があるのは、佐瀬との関係からいえばしかたのないことである。

「要するに佐瀬常務の説明だと、今度のカルテル騒動で米国の日本に対する風当たりが強まり、それで日本企業が米国から一斉に撤退するという事態も充分に予想される。だが、日本企業が米国から撤退した場合、米国では生産過剰気味の半導体が、逆に品薄になる可能性がある。何しろ日本企業のシェアは六十パーセント近くになっているんだから、考えられないことではない……だからこの段階でわが社として米国に生産拠点を拡充すべきだ、というのが計画の骨子ということだね。考え方としては面白いが、わが社だけがどうして米国に残留することが可能なのか、そのあたりの保証がなければ、君の計画は画餅に終わってしまうのではないかね？」

橋本専務が質問したことは、この会議で先はどから誰もが疑問としていたことで、対日感情が悪化している米国で、いったいどうやって日興製作所だけが残留することができるのか、そんな芸当ができるのか、である。佐瀬の表情はわりあいけろつとしている。そのことはさして問題にしている風情ではない。なにか策がありそうな顔をしている。佐瀬は平然と答え

た。

「それならば、その根拠を申し上げておきましょう。まず第一に、米国政府が今度の問題で日本の半導体メーカーを法的強制力を行使して、アメリカから追い出すといった強硬手段に訴えるかどうかです。一部ではその可能性を真剣に議論しているようですが、私は否定的な考えを持っている。米国政府はそこまで日本を追い詰めるようなことは決してやらないだろう、と私は思う。そんなことをやって、米国には少しも得にはならないからです。そこは彼らも冷静に判断するだろうと思います。逆にいえば、米国に残ろうと我々が腹を決めれば、引続き米国で半導体を生産することは可能なのです。つまるところ、これは我々の覚悟の問題です」

「その根拠は……？」

橋本専務が問いた。

「日本を追い出す法律的な裏付けがないことが第一。第二は米国にとって日本は仮にも同盟国です。日本企業をアメリカから追い出すということは、安全保障を含めて日本との同盟関係を清算することを意味します。アイコク政権がそこまでやる覚悟があるかどうか、いくらなんでも、そんな馬鹿げたことをやるはずはない。その意味でアイコク政権の今度の問題に対する対処の仕方と申しますか、この場合、なんらかの対日制裁の動きが出てきたとしても、その選択肢は限られてるように思えます」

マスコミや識者の間で、反トラスト法違反事件を契機に日米関係は戦後最大の危機を迎えているなどといったセンセーショナルな議論が横行している。それに産業界も浮き足立っている。だが、米国が日本との関係で、安全保障までも再検討するようなことを考えているかどうか、それは佐瀬がいったように確かに疑問とするところだった。冷静に判断すれば、佐瀬のいうとおりだ。佐瀬の話はまだ続いている。

「結論からいえば、たぶんこういうことになるのではないか……つまり米国の世論に圧されて、日本企業は反トラスト法裁判の結論が出る前に、自主的に米国市場での生産を自粛、あるいは大幅に生産を縮小する措置をとることで、米偏に了解を求め、これを日米両国政府が黙認をする……そういう形で決着する可能性がある。しかしながら最も大きな可能性について

いえば、それは日本企業が一時的に米国から撤退することではないかと思
います」

「要するに居直りということだなあ」

田熊専務がいった。会議室のなかに笑い声がおこった。ただ、渡辺副社
長だけは慨然としている。

「ありていにいえば、そういうことになりましようか。しかし、わが社が
米国に引き続き残留して、新規に工場を建設するということは相当な覚悟
が必要とされることも、これまた確かなことです。ですから最高経
営会議でこの問題を充分に検討のうえ、最終判断をいただきたいというこ
とです」

要するに問題は、米国から日本企業が自主的に撤退を決めた場合、日興
製作所だけが別行動をとる覚悟を最高経営会議が決められるかどうかであ
る。日興製作所が別行動をとった場合、世間や行政当局がどう反応するか、
厳しい反応がでてくることが予想される。孤立無援の闘いとなることを覚
悟せねばならないだけでなく、袋叩きになる可能性もある。とくに米国で
は激しい反日キャンペーンが展開されている最悪の時期だけに、この計画
を実現するためには、相当な覚悟をもって取り組まなければならないこと
だけは確かだ。佐瀬はそのことをくりかえし強調した。大竹会長は相変わ
らず寡黙だ。

「四億ドルといえば、現在の円・ドル換算レートでいっても、約五百億円の
投資規模となる。これだけ巨額な投資を米国に集中させてよいものかど
うか、私にはリスクが大き過ぎるように思える。それにだ、今度の場合、
わが社だけが別行動をとるというわけにはいかないのではないかね……」

ぼそりと、そういったのは本島総務本部長だった。これ以上議論を要す
ような問題ではない、そういう響きがあった。立場としてはニュートラル
な位置にある本島の発言であるだけに、出席しているほとんどの役員は
その一言に深くうなずいた。佐瀬の提案した計画に賛成する役員は、ほと
んどいないようである。佐瀬の提案を無視するような冷たい空気が流れて
いる。天井をにらんでいる渡辺副社長の表情は満足そうだった。

「考え方としては面白い。ただ、事態はあまりにも流動的だ。どうだろう

か……佐瀬常務から提案のあった問題は、最高経営会議の懸案事項として引き続き検討することにしたらと思うのだがね」

そういったのは田熊専務だった。それは意外な発言だった。大竹会長が大きくうなずき、同意の意思を示した。

「しかし、本島本部長がいわれたようにこの問題は、ほとんど議論の余地がない、そのように思えますがね……」

橋本専務が細身の幅をさらに縮めるようにしていった。

田熊専務と橋本専務とのあいだで、佐瀬の計画提案を継続案件とするかどうかで、対立が続いた。あまり意味のある議論とはいえない二人のやりとりに、会議は次第に白けたものになってきた。

そこで発言を求めたのが、会議では終始沈黙を守っていた坂本社長だった。これは異例のことである。大竹会長はちよつと驚いた顔をした。坂本社長は遠慮がちに、大竹会長のほうを振り返ると、いつもの物静かな調子で切り出した。

「今度の反トラスト法違反による日本企業の摘発は、どう考えても米国の陰謀のような気がしましてね。これからどう動くにしても米国の最終的な組いがどこにあるのか、それを見定めてからではないと、これは迂闊^{うかつ}には効けないのではないか、私にはそのように思えるのですが……たぶん、佐瀬常務がいったように日本企業の大半は反省の意味を含めて米国での生産を一時的に中止することも考えられる。この段階で米国になんらかの形で拠点を残しておくのは、意味のあることだと思いますね」

「米国の陰謀とおっしゃると……？」

渡辺副社長が改まった調子で聞いた。

「ええ、これは単なる想像ですが、これまでの事件の流れを追っていきますと、あまりにも話がうまくできている。皆さんにはそう思えませんか。米国がこうした非常手段に訴えてまで、日本に揺さぶりをかけてくる理由ですが、そこを充分に考えてゆかなければならないのではないかと思い、私はあれこれ考えているのですが、どんなものでしょうか……会長？」

大竹会長は暫く考えこんでいた。背もたれからゆっくり幅を起こすと、改めて坂本社長の方を見ながら、話し出した。暖房が効き過ぎているのか、

それとも血圧が高いせいなのか、顔が真っ赤に火照っていた。肌は異様に
つやつやと光っている。

「事件が起こってからわたしもそのことを考えてきた。日本企業を米国市場から放逐することに彼らの狙いがあるのか、それとも別なところに狙いがあるのかをね……しかし、いまの段階では結論を出せるだけの材料がない。こうした状況のなかで、同業他社の大半は、一時的に米国から撤退することもこれは仕方のないことだ、そう考えている。ここでわが社としては、同業他社と一蓮托生で米国から撤退するか、それともなんらかの形で権益を残しておくか、これは難しい判断だ。しかし、これもはっきりしていることだが、米国はわが社にとって極めて重要な市場であることは変わらない。その権益をどうやって残すかだ。まあ、佐瀬君がいうような巨大投資は考えられないにしても、そこんところの配慮は必要だね」

会議の結論はみえてきたようである。結局大竹会長は、佐瀬の提案を棚上げすることを考えているようだ。大竹会長の発言はあくまで慎重だった。役員のなかで、ただ一人、佐瀬の計画に関心を示したのは、田熊専務だけだ。この時期に米国に巨額な投資をすることは確かにリスクが大きいことはわかっていて。常識ではそういうことである。しかし、米国市場では遅れをとっている日興製作所としては、この機会こそが絶好のチャンスではないか。昔の大竹会長であつたら、たぶんこの話に乗ったはずである。佐瀬はつやつやした大竹の肌をみながら改めて、大竹の歳のことを考えていた。

3

理恵はいつしか佐瀬の腕のなかでぐっすりと、眠っていた。佐瀬はそつと、理恵の軀を腕からときはなすと、枕元に書類を引き寄せ熱心に目を通し始めた。

書類の表題には『A E S 社買収の件』とある。書類は米国の調査会社が作成したもので、分厚い報告書だった。佐瀬はベッドのなかで、こうやっ

て仕事を始めてしまう悪い癖がある。報告書を読み終えると、佐瀬はほつと溜息を漏らした。

夜の高層ホテルは静まりかえっている。もう明け方に近い時刻だった。理恵は深い眠りのなかにあるようだ。光沢のある理恵の髪が純白のシーツに鮮やかに広がっている。佐瀬はそっと、理恵の髪を撫で、理恵の寝顔を見つめていた。理恵は軽く寝返りを打ち、眩^{まぶ}しそうに目を聞いた。

「眠れなかったの」

「ああ、起こしてしまったようだね」

「調べもの……？」

「うん」

理恵は枕元におかれていた報告書をばらばらとめくつてみた。煙草をくわえ、深く吸い込んだ。報告書を読みはじめた。そして、報告書に引き込まれていった。

「……実をいうと君の意見を聞きたいと思っていたんだ」

「この会社を買収する計画なの？」

「そう……」

「思うように話が進んでいないのね」

「そういうことだ」

理恵は無理もないと思った。AES社とは正確に言えば、アメリカン・エレクトロニクス・システム・コーポといって米国では、中堅のベンチャー型のソフトハウスである。国防総省向けの独自のカスタム半導体を開発したことで、関係者の間で一躍有名になった企業である。最近では16メガビットRAMに次いで、次世代の半導体である32メガビットRAMの開発に成功した、と発表して話題を集めている。

が、理恵は報告書に目を通してながら世間の評判とはだいぶ実態の異なるAES社の経営状態をみて、ベンチャー企業の虚構をみたような気がした。研究開発費が巨額な規模に膨らんでいるのに対して、売上が伸びていないことが、経営を圧迫しているようだ。このため、ここ三年ほどAES社は連続して大幅な赤字を出している。銀行からの借入ももはや限界のようで、経営指標は倒産ぎりぎりの状態にあった。こんな赤字会社をどうして買収

しようというのか。

佐瀬は理恵に対して、経営の機微に触れることでも、隠すことなく平気で話し、時には理恵に意見を求めるようなことをした。理恵には全てをさらけ出しているようなところがあった。

佐瀬は訓練されたビジネスマンであり、決して無警戒ということではない。それだけ理恵を信用し、愛しているということなのである。二人は仕事の上では何の利害関係も持ち合わせていないだけに、微妙な会社経営のことについても客観的な立場で議論することができた。

AES社の買収計画、これは日興製作所のなかでも、ごく限られた人間にしか知らされていない極秘の計画のようで、報告書は誰がこれを読んだかをチェックする署名欄が設けられている。最初にこれを読んだ人間は佐瀬自身であり、佐瀬の署名がくつきりと浮かんでいる。

「例の計画は最高経営会議であつさりと潰されてしまつてね。それに変わる第二段がAES社の買収というわけさ」

「計画つて……？」

二人の話はいつもこんな調子で始まる。理恵は佐瀬がやっている仕事のどれもこれも関心があつた。睡魔はいつのまにか、どこかに飛んでいつてしまったようだ。理恵にとってビジネスの世界は未知の世界ということもあるが、それだけでなく、ともかく佐瀬のやっている仕事に関心があるのだ。

「この間、話さなかつたかなあ……」

佐瀬はかいつまんで、米国で半導体を生産する計画を理恵に話して聞かせた。そういえばこの間、佐瀬は別れ際に「これは千載一遇のチャンスかも知れない」とか、奇妙なことをいつていたのを思い出した。あれはそういうことだったのか、いかにも佐瀬らしい思い付きだと、理恵は思った。

「無茶ね」

なにしろこんな時期である。日米関係は半導体のカルテル問題をめぐって激しく揺れているのだ。社内に慎重論が出てくるのは当然である。米国で半導体の供給がタイトになることが予想されたとしても、やはりこの時期に大型投資計画を打ち上げることは、刺激的に過ぎるように理恵には思

える。

「君もそう思うかね」

「反対されたのね」

「そうなんだ。あの太田会長までが慎重論だった。結局は誰も賛成の手を上げるものはいなかった。ただ、今日は社長の坂本さんが会議で珍しく発言してね」

理恵はいくどか会社の話を聞いていることもあって、日興製作所内部の社内勢力地図はだいたい頭のなかに入っている。佐瀬がいうように日興製作所の坂本社長が会議で発言するなんて、確かに珍しいことだ。

「で、坂本社長はどんなことを話したの？」

「まあ、話の内容はたいしたことはないんだが、ちょっと気になったことは、今度の事件は米国の意図的な陰謀ではないか、彼はそういう意味のことをしきりにいつていた。もちろん、根拠はいわなかったけど」

米国の陰謀……その言葉を聞いて、理恵はちよつとだけ、気になる論文を読んだことを思い出した。その論文というのは、今度の調査の必要から米国議会の図書館に直接コンピュータでアクセスして調べたもので、商務省が大学の研究所に委託して作成した議会向けの報告書であつた。表題には『米国市場の防衛』とあつた、と理恵は記憶している。

外国企業との競争において、民間と政府部門はどのようにに対応するか、対応は協調的な性格の問題と競争的・敵対的な問題の二つにわけて、それぞれ問題の性格に応じて考える四つの戦略的対応マトリックスをこの論文は提唱していた。もちろん、論文は特定国を対象に書かれたものではなかったが、取り上げているテーマからすれば、それは日本企業を念頭において書かれた論文であることは間違いなかった。理恵はそのことを、佐瀬に話した。

「ほほう、今の状況を想定して、書いた論文ともいえるね。もしかしてそれが、今回の事件のシナリオになっていたりとは考えられないだろうか？」

「まさか……これは公開されている学術論文なのよ」

「論文の筆者は？」

「ロバーツ・ハドソンとかいう人で、コロンビア大学の教授だったと思う」

その論文には、商務省がスポンサーになったこと、ロバーツ教授が大学のなかに研究チームを組織、二年がかりで研究を行った成果をロバーツ教授自身がとりまとめたものであることを、前書きのなかに記してあった。佐瀬は『米国市場の防衛』と題する論文に関心を持ったようだ。

「戦略対応マトリックスとかいったね。そのなかで、ロバーツ教授はどんな方策を提唱しているのか、これは大変興味がある」

論文の内容をすべて覚えていたわけではなかったが、そこには今日の状況を示唆^{しさ}するかのような興味ある事実が書かれていたことは確かだった。

経済摩擦の調整手段として、輸入禁止の措置であるとか、数量の制限などの措置をとることは、米国経済を弱体化させる結果となり、競争力を強化するうえで、たとえば生産性や品質の向上を図るということではかえって逆効果となるだけでなく、消費者物価を引き上げ、インフレの要因にもなると指摘していた。だから外国企業の市場攻勢に対しては迂回作戦をとる必要をとくに強調していたことを理恵は覚えている。その迂回作戦のひとつとして、この論文の筆者はとくに外国企業の攻勢に対しては、合併や企業提携などを進めることで、摩擦を回避することが戦略対応マトリックスの第一段階として、有効性を持つと提唱していた。

「それは外国企業と協調的対応が可能な段階での対応策ということだね。そうすると問題は、敵対的対応の段階で、彼はどのような政策を打つかだ」理恵は話をしているうちに論文の内容を次第に思い出してきた。佐瀬は腹ばいになりながら理恵の話を聞いている。そうやって理恵の話を熱心に聞いてくれる佐瀬のことが好きだった。

「戦略マトリックスを四つの段階にわけて、それぞれの段階に応じた戦略を発動することを提唱していたようだったわ」

市場の防衛と反撃のためには、まず、第一段階で外国企業との協調の可能性を模索すること、この協調の政策が外国企業に受け入れられない場合は、第二段階として、政府の直接的な保護政策を要請すること、第三段階は特定の外国企業との間に協調的な関係を作り出す一方で、他の協調的でない外国企業に対しては徹底したコンペティション政策を効果的に実施する、第四段階は外国企業に対する完璧なコンペティション政策を実施、無

差別完璧に米国市場から放逐する……それがこの論文で提唱されている外国企業の市場攻勢に対する反撃のシナリオだった。

「その論文でいうと、ちょうど第四段階のオペレーションに入ったということになるのかね。外国企業を米国市場から完璧にしかも無差別に放逐するというのが、彼らの最終的な戦略目標となっているのだろうか」

この論文が果して現在起こっている事態のシナリオとして採用されているかどうか、そのことについてはさしたる確信はなかったが、佐瀬に改めてそのことを指摘されてみると、不思議にそんな気もしてくる。

現在の状況は第三段階か、あるいは第四段階のオペレーションを実施中なのではないか。日本の企業を無差別完璧に米国市場から放逐する作戦だとすれば、これは米国にとってもリスクが大きい。場合によっては日本は米国の同盟関係から離脱する可能性だって出てくる。そこを彼らは考えないはずがないと思えるからだ。

現在米国が必要としていることは、日本企業に「教訓」を与えることではないか。そのためには進出している日本企業を差別化、他の協調的でない進出企業に「教訓」を与えること、それが当面した作戦計画の重点におかれているのではないか。反トラスト法違反で司法省が日本企業を訴訟に踏み切ったことをそんな目でみてみると、状況は違った展開をしているかのように映ってくる。理恵はそんな意味のことを口にした。

「僕もそう思う。そうだとすれば、この作戦を指揮しているのはいったい誰なのか、ホワイトハウスか、米国の電子業界なのか、それとも別なグループが存在しているか。別なグループが存在するとすれば、それはモンスターだ」

今度の反トラスト法違反事件は、意図的に仕組まれた陰謀ではないか、そういう確信を佐瀬は深めているようだった。もしそうだとすれば、相手は米国の政府中枢や世論までも自由にコントロールできるほどの強大な力を持っている。

佐瀬はベッドから抜け出すと、窓のカーテンを大きく開いた。既に淡い太陽の光が丹沢の山並を照らし出していた。一番電車が走り出しているようだ。中野のあたりから新宿方面に向かって走る中央線の煉瓦色の電車の

帯が高層ホテルの窓からくつきりと見えた。まだ人影は見えなかった。街は静まり返っている。



理恵は佐瀬に寄り添うようにして窓際に立った。今朝はきれいに晴れ上がっている。窓の下に広がる東京の街はまるで別世界のようにはみえた。こうしてみると、東京はとても美しい街だ。甘えるようにして、佐瀬の軀にそつと触れてみた。

「少し痩せたみたい」

「……そういえば、洋服が合わなくなってきたような気がする」

「どこか軀の具合が惑いなのでは？」

「いや、このとおり元気だ」

そういうと、佐瀬は力強く抱き締めた。

理恵はなされるままに軀を佐瀬に預けた。理恵を抱くときのいつもの力強さが失われているようにも思えた。

理恵は、佐瀬の家庭生活のことには一度も触れたことはなかった。そういうことをいいはじめたらきりがなくなるからだ。それにみじめになってしまう。仕事がハードなことはわかっていてもつもりだが、家庭ではいったいどんな生活をしているのか。

本当に軀は大丈夫なのか。佐瀬が遠い存在のように思える。自分は佐瀬にとって本当に必要な存在であるのか。そばにいて佐瀬の健康管理に心を砕いてみたい……理恵は本気になってそんなことを考えている自分に気付いた。

「出張するとかいつていたね。日程は決まった？　もしかして僕も米国に出張することになるかもしれないんだ」

「時期が同じだといいいんだけど、向こうで逢えると嬉しいわ。どうかしら？」

「今回はAES社の件なんだが、日程はまだ流動的なんだ。向こうで逢えるように日程を調整しようじゃないか」

「ええ……」

理恵は言葉少なく答えた。

そのことは嬉しいが、理恵には、佐瀬の軀のことの方が心配だった。

だが、佐瀬は自分の軀のことには無頓着である。見えぬ敵・巨大なモンスターに、どうやって闘いを挑むか、佐瀬の頭はそのことで一杯になっているのだろうか。興奮で目は光を帯びていた。

（つづく）